

2026年1月4日降誕後第2主日

旧約聖書 エレミヤ書 31章7-14節

使徒書 エフェソの信徒への手紙 1章3-14節

福音書 ヨハネによる福音書 1章《1-9》、10-18節

新年あけましておめでとうございます。本日は、2026年最初の主日です。教会歴は、降誕後第2主日ですが、昨年度から試用版の新しい聖書日課を用いていますので、本日主日の聖書箇所は（旧約と詩編は選択肢がありますが）、ABC共通となっており、昨年と同じです。

また、本日の福音書は、ヨハネ福音書の冒頭で、『聖書』の中でも有名な箇所の一つです。1章1節から9節までが《》に入っていますが、昨年の降誕日（第3聖餐式）で1節から14節を学びましたので、本日は重複する部分もあります。新しい聖書日課では、ほぼ毎年その年の最初の主日福音書は、この箇所となります。結論を先取りすることとなります。時間と空間を超えた信仰の真理を示すヨハネ福音書の冒頭を、一年の始めに学ぶことは、教会としても一人の信仰者としても大変意義のあることだと思います。

ヨハネ福音書は、その成立に関する事柄もまたその背景も複雑です。ユダヤ教のいろいろな考え方のみならず、ヘレニズム文化圏のギリシアやローマの思想や宗教など影響があるからです。また、福音書の構成や個々の物語も独特であり、マタイ、マルコ、ルカ福音書を前提として読み進めると、疑問に思うところも多くあります。しかし著作の目的は、非常に明確です。それは、福音書自身が記しているように、「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためにあります。また、信じて、イエスの名によって命を得るためにあります」（ヨハネ 20:31）からです。要するに信じればよいのです。

さて、本日は、ヨハネ福音書を中心に、また《》に入った部分も含めて学びますが、1から14節は、『あった』ものと『なった』ものとが対照的に記されています。『あった』ものとは、「言」、「神と共に」ということ、「神」（「命」）、「光」です。そして『なった』ものとは、「万物」、「肉」（「命」）です。「命」が（）としたのは、どちらともいえるからです。

『あった』ものは存在を示し、全ての存在の基礎を示します。これは人間の営みとは無関係に存在するものです。わたしたちがまだ認知していない事柄も含まれます。『なった』ものは、歴史の中で生成したもの、主なる神様と人間との関わりの中で作られたものを示しています。

ヨハネ福音書の冒頭は、創世記の冒頭に似ていると一般的に言われます。この『あった』と『なった』の関係は、おそらく天地創造の物語を前提としていると思われますが、イエス様によって、人間のすべての理解を越えた始まりが明らかになったことを述べているのです。創世記は、第一日目から七日目まで時間順序となっていますが、ヨハネ福音書は、その時間の感覚を超えていました。知

恵に強い関心を持つユダヤ教の人々が、このヨハネ福音書に世界の創造に先立つ「知恵」の存在を見出すのはそのためです。しかし、「知恵」ではなく、初めに「言」があったとするのがヨハネ福音書の特徴です。

そして、次の特徴として、「万物は言によって成了た」（ヨハネ 1：3-4）とある通り、この「言」は、『あった』言葉であると同時に『なる』ものなのです。つまり「言」には、人間と関わろうとする意志があるのです。それゆえ、この「言」は、主なる神様の力・意志といつてもよく、主なる神様とは切り離せない、その本質の現れ・形に他ならないのです。

「万物は言によって成了た」という一行は、主なる神様の言葉が働きとして、創造、啓示、贖い、救いにおいて現われることを示します。そして、もっとも大切な事柄として、「万言の内に成了たものは、命であった。この命は人の光であった」と述べられるのです。ただし、この箇所の訳は様々な意見があり、前の新共同訳では「言の内に命があった」と訳されていました。「命」は、「あったもの」なのか、「なったもの」なのか、意見が分かれるところですが、起源は主なる神様であるという点は共通しています。また、大切なことは、命の関する一般論を述べているのではなく、その「命」が人間を照らす光であるということです。もちろん、その光である「命」とはイエス様であり、この命である光を『証し』をするのが歴史上に生きた洗礼者ヨハネです。洗礼者ヨハネの役割は『証し』にのみに限定されているのです。

14節から18節は、イエス様の登場によって明らかになった、主なる神様の意思、洗礼者ヨハネの位置づけ、律法とイエス様の関係などをまとめています。大切なことは、「言は肉となって、私たちの間に宿った。私たちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」（ヨハネ 1：14）と信じることであり、その根拠が、「いまだかつて、神を見た者はいない。父の懷にいる独り子である神、この方（もちろんイエス様）が神を示されたのである」（ヨハネ 1：18）からです。

ヨハネ福音書が書かれた時代の混乱は、現代のわたしたちが経験している混乱よりもいろいろな意味で単純であったかもしれません。しかし、ヨハネ福音書は、どんなに混乱した世界の中にあっても、それが主なる神様の造られた世界であるから、イエス様という光がある、いつでも人間にとっても希望と信仰の確信があることを示しています。教会が存在する意味とは何か、人間の側から見れば、それは集まる一人ひとりによって異なるといえますが、「言」である主なる神様から見えれば、わたしたちに真実と愛を与えてくださり、わたしたちが集う教会の中心に宿られたイエス様に感謝をする、その感謝の交わりを続けることです。その光をこの世界に示し続けることです。わたしたちにおいては、そのような信仰を続けることです。その信仰に基づいて歩み続ける限り、これからの中未来にどのようなことがあっても、常に希望があります。そのことを、新しい一年を始める最初の主日に、あらためて心に刻みたいと思います。